

相談支援つうしん

＜第 50 号＞平成 30 年 11 月 21 日
湘南養護学校 支援連携部
相談支援係—教師編—

～校内の風景～ 発信する力を伸ばす実践①

小学部では、1 年生から AAC（拡大・代替コミュニケーション）を活用して子どもたちが自分の思いを人に伝えるスキルの獲得を目指して指導が行われています。今回は、授業の中での取り組みの 1 つをご紹介します。

指導環境設定

教室中央に指導のための机を 2 台設定します。そして、子どもたちを 2 グループに分けてそれぞれ教師と子どもが机を挟んで 1 対 1 で向き合えるようにして、順番に指導できるようにします。2 グループに分けることで順番待ちの時間が減り、できるだけ多く順番が回ってきます。

指導内容

それぞれの子どものお気に入りのものとそうでない物（洗濯バサミなど）を準備します。そして、それらを表す絵

カード、先生の顔写真カード、“ください”を表す絵(文字)

カード、そしてコミュニケーションバーを準備します。子どもの発信レベルに応じて、カード 1 枚を使う子供もいれ

ば、3 枚のカードで文を作って音声も伴って、「〇〇先生、積み木ください。」と言う子どももいます。

小学部では、休み時間や給食の場面も使って発信する力を伸ばす取り組みが積極的に進められていますが、授業の中でもこのように取り組まれていることを改めて知るよい機会となりました。



☆報告するスキルはいつ教えるとよいか☆

PECS では、カード 1 枚を渡して自分の欲しいものと交換するのはフェイズⅠやⅡにあたりますが、報告することはフェイズⅤにあたります。つまり、最初は自分の好きな物を要求するスキルを獲得した上で、報告するスキルを獲得するという段階を踏みます。なぜなら、要求して利益が得られることは動機づけになりますが、「終わりました」といった報告することは利益を得にくい場合が多く、動機づけにつながりにくいからです。そのため、報告するスキルを獲得するには、自分の要求に応じてもらったという経験の十分な積み重ねが必要です。この要求に応じてもらったという経験の積み重ねが人に対する信頼関係を育むことにつながり、この信頼関係に基づいて、直接的な利益が得にくいような報告するという発信も行うことができるようになります。

発信する力を伸ばす実践②

高等部の A さんは、発音に不明瞭さがあります。そこで、自分の伝えたいことをはっきりと相手に聞き取ってもらうために iPad アプリのドロップトークの音声機能を活用しています。具体的な発信の場面の 1 つとして、A さんは朝の会で健康観察を行う役割を担って、クラスメイト 1 人 1 人の名前を呼んで各自の健康チェックを行っています。

A さんの場合、音韻を正確にとって発声することができるので、自分で発声したあとにドロップトークの音声再生ボタンを押して、あらかじめ入力されているクラスメイトの名前が読み上げられるようにしています。ここで大切なことだと思ったのは、アプリの音声出力に任せっぱなしにせず、必ず自分で発声していることです。やはり、自分でできることは自分ですることは、子どもの力を伸ばし自分でするという気持ちを育てることにつながると思います。

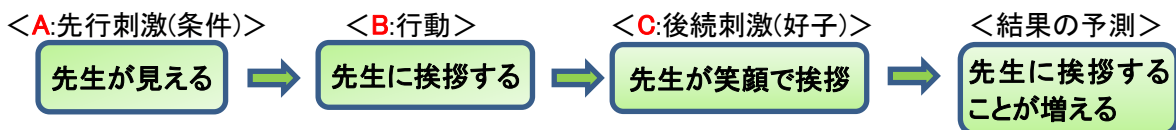


発音の明瞭さや時間的な効率を優先すると、アプリで済ませてしまえばよいという考え方になります。たとえば発音が不明瞭であっても、時間が倍かかったとしても、本人が自分でできることは遂行するようにしているのはすばらしいと思います。子どもの持っている力を最大限に伸ばそうという教育にかける熱意が感じられます。また、朝の会という毎日必ず確保できる時間を活用するというところにも工夫が感じられます。授業という枠を超えて、毎日同じように使える時間というのはとても貴重です。毎日やれば獲得や定着も早いので、こういった機会を活用しない手はないと思いました。

～ルールによる行動のコントロール～

話は変わって、「ルール」は「信号を守りましょう」とか、「廊下を走ってはいけません」といった決まりのことです。こうしたルールには、なぜそれをしないといけないのか、それを守るとどうなるのかといったことは通常記述されていません。ルールが十分に守られる(強化される)ためには、そのルールを細かく分析して守られるような仕組みを記述することがときには必要です。

例えば、「あいさつしましょう」というルールがあったとします。これを効果的に機能するように、挨拶されたら笑顔で挨拶を返すことを好子として提示することにします。



この仮定をもとにして、ABC の部分をルール化して記述します。この場合で言うと、「先生に挨拶しましょう。そうしたら、先生が笑顔で挨拶を返してくれます。」というルールになります。ルールを上手に活用できると、直接的に行動を強化(消去、弱化)するときとは違って、手立ての導入がスムーズになります。クラスのルールや目標を立てるときにも、「～～すると、◎◎がもらえる/できる。」といった下線の部分に重点を置いて、得られる好子や結果を明確にしておく、より取り組みへの意欲を持ちやすくなり、成果も上がると思います。例えば、「友達と仲よくしましょう」⇒「友達と仲よくしましょう。そうすると、毎日気分よく過ごせます。」とか、「授業中は集中して話を聞く」⇒「授業中は集中して話を聞く。それによって聞き漏らしをなくし、周りからの信頼を得る。」など(もうちょっとまじな例が思い浮かべばよかったのですが、すみません)。少しでも参考にさせていただければ幸いです。